



國家出版基金項目  
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

「十二·五」國家重點出版規劃精品項目

# 蒙疆農業經濟論

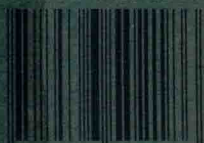
內蒙古大學內蒙古近現代史研究所 內蒙古自治區圖書館學會 主編  
內蒙古外文歷史文獻叢書「第三輯」 資源經濟係列「二」

山田武彦 關谷陽一  
內蒙古大學出版社



責任編輯 張 昱 彩 娜  
印章篆刻 王雲山  
裝幀設計 張燕紅

ISBN 978-7-5665-0218-6



9 787566 502186 >

全輯定價：¥1080.00元



國家重點出版規劃項目

十二五 國家重點出版規劃精品項目

內蒙古大學『蒙古與北方民族史文獻  
檔案整理研究』創新團隊係列成果



資源  
經濟

# 蒙 疆 農 業 經 濟 論

山田武彦 關谷陽一 共著

內蒙古大學出版社

圖書在版編目(CIP)數據

內蒙古外文歷史文獻叢書·資源經濟係列(二)蒙疆農業經濟論/周太平,李曉秋,武莫勒主編. —呼和浩特:內蒙古大學出版社,2012.8

ISBN 978-7-5665-0218-6

I. ①蒙… II. ①周… ②李… ③武… III. ①地方農業經濟-調查研究-內蒙古-日文 ②農業經濟-調查研究-蒙古-日文 IV. ①F327.26 ②F331.1

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2012)第 201416 號

內蒙古外文歷史文獻叢書 (第三輯)

資源經濟係列 (二) 7

---

|      |                                     |
|------|-------------------------------------|
| 書 名  | 蒙疆農業經濟論                             |
| 叢書編者 | 內蒙古大學內蒙古近現代史研究所<br>內蒙古自治區圖書館學會      |
| 原書作者 | 山田武彥 關谷陽一                           |
| 責任編輯 | 張 昱 彩 娜                             |
| 印章篆刻 | 王雲山                                 |
| 裝幀設計 | 張燕紅                                 |
| 出 版  | 內蒙古大學出版社<br>呼和浩特市大學西路 235 號(010021) |
| 發 行  | 內蒙古新華書店                             |
| 印 刷  | 內蒙古地礦印刷廠                            |
| 開 本  | 889×1194/16                         |
| 印 張  | 33                                  |
| 字 數  | 485 千                               |
| 版 期  | 2012 年 8 月第 1 版 2012 年 8 月第 1 次印刷   |
| 標準書號 | ISBN 978-7-5665-0218-6              |
| 全輯定價 | 1080.00 元                           |

---

本書如有印裝質量問題,請直接與出版社聯繫

內蒙古外文歷史文獻叢書編委會

編委：周清澍 王志誠 馬永真

齊木德道爾吉 喬玉光 朝克

李曉秋 周太平 忒莫勒

寶音德力根 娜仁格日勒

蘇德畢力格 張志忠 朱瑞英

王凱 趙英 張昱 彩娜

執行主編：周太平 李曉秋 忒莫勒

## 前言

人類的歷史和文化，除了民間存留的一些傳統觀念和風習外，主要靠在歷史滄桑中存留下來的各種文獻（記錄有知識的一切載體，包括紙本、音像、口碑等）和遺迹遺物（遺址和各種實物等）保存并傳承。如果沒有這些文獻和遺迹遺物，我們就喪失了記憶，就沒有歷史，就沒有文化，就無法積累知識，更無法把握現在和面對未來。因此，重視并妥善保存文獻和遺迹遺物，在任何地方都應是政府和整個社會關注并支持的重要社會事業，其意義之深遠，無論怎樣評價都不過分。

內蒙古地處邊陲，歷史上多牧野長歌，少詩書弦誦，自身的文獻保存相對較少，再加上近代戰亂頻仍，文獻損失和流散嚴重。這種情況，更凸顯出外國人相關記述及研究成果的獨到價值和作用。

從十三世紀意大利傳教士普蘭·迦爾賓、法國傳教士威廉·魯不魯克出使蒙古後撰寫的游記及以後的《馬可波羅游記》起，西方對蒙古地區的記載逐漸增多，較著名的有：十八世紀法國傳教士張誠的日記和回憶錄、俄國使者N·俾丘林的《文件資料》（1828年）、古伯察的《韃靼西藏旅行記》（1851年）、英國傳教士詹姆士·吉爾摩的《在蒙古人中》（1883年）和《蒙古探險記》（1886年）、約翰·赫德裏的《黑暗蒙古游記》（1910年）、俄國探險家M·普爾熱瓦爾斯基的《蒙古和唐古特人地區》、俄國學者格·波塔寧的《中國的唐古特、西藏邊區與中央蒙古》、A·M·波茲德涅耶夫的《蒙古及蒙古人》（1898年）、B·K·科茲洛夫的《蒙古與喀木》（1905~1906年）和《蒙古、安多和死城哈拉浩特》（1923年）、英國D·萊斯頓伯爵的《從北京到錫金——穿越鄂爾多斯、戈壁灘和西藏之旅》（1908

年)、丹麥探險家亨寧·哈士綸的《蒙古的人和神》(1935年)等,也涌現出不少舉世聞名的專家學者,如瑞典的A·C·多桑,法國的R·格魯賽、P·伯希和L·韓百詩,俄蘇的I·施密特、O·科瓦列夫斯基、K·戈拉通斯基、W·巴托爾德、B·符拉吉米爾佐夫、N·鮑培,德國的E·海涅什、W·海西希、H·福蘭克,美國的O·拉鐵摩爾、W·柯立甫、H·賽瑞斯,匈牙利的L·李蓋提,波蘭的W·L·科特維奇,芬蘭的G·J·蘭司鐵,比利時的田清波,瑞典的斯文·赫定,等等。其中,俄國人表現得尤為突出。從十九世紀中葉以來,隨着沙俄勢力的南下擴張,伴生出文化上的『東方學』(包括蒙古學)研究,先後有大批旅行家、考察隊、軍官、情報人員等深入蒙古腹地進行調查,其中表現最為搶眼的是沙皇政府支持下的皇家地理學會。據不完全统计,在僅僅四十年的時間裏,竟先後有五十多支俄國考察隊來到蒙古地區、西北地區及青藏地區進行實地調查研究,撰寫出各種著作、專論、考察報告、旅行記等,篇幅厚重者竟多達數千頁。

十九世紀末日本崛起,甲午戰後占領朝鮮,日俄戰後又奪得旅大,通過南滿鐵路滲入滿蒙。出于不斷擴張的需要,日方先後派出大量人員赴滿蒙地區進行調查,編纂並出版了數量眾多的調查報告、行記、踏查記錄和研究專著,還創辦有相關刊物;侵占中國東北和內蒙古大部後,更在『滿洲國』和『蒙疆政府』的名義下進行了大量調查研究,官私著述眾多,成為海外對蒙古地區記載最為豐富的國家。在這方面,除個人行為外,表現突出的有南滿洲鐵道株式會社調查部、善鄰協會、東亞同文書院和偽滿、蒙疆轄下的各有關機構。

日本方面的調查既有對某一地方的綜合記述,也有關於資源、物產、氣候、生態、商業、土地、交通、衛生、民俗、宗教、教育等各方面的專項記載,其覆蓋面之廣,觀察之細密,數量之巨大,令人驚嘆。以此為基礎,其相關的研究著述,也是成果豐碩。諸如參謀本部的《鄰邦兵備略》、鬆本隼的《東蒙古真相》、關東都督府陸軍部的《東部蒙古志草稿》、柏原孝久和浜田純一的《蒙古地志》、善鄰協會的《蒙古大觀》、河原操子的《蒙古土產》、鳥居龍藏的《東部蒙古的原始居民》、鳥居夫人的《從土俗學考察蒙古》、後藤富男的《蒙古游牧社會》、藤岡啓的《滿蒙經濟大

觀》，以及滿鐵調查課的《滿洲舊慣調查報告書》（蒙地卷）、偽滿土地局的《關於舊蒙地》、偽滿產業部的科爾沁各旗區調查報告書和興安局所屬各省旗實態調查報告書等衆多日文資料，頗爲可觀。

據目前掌握，有關內蒙古的原版外文文獻約有數千種，其中大部分是圖書，還有期刊及其他類型的文獻，有些還標明屬於機密。

這些外文著述的撰著動機目的各異，有的是獵奇，有的出于研究愛好，有的就是爲其擴張服務，其調查和研究也難免有不同的立場和局限。但不能否認，由于撰著者具有與國人不同的文化知識背景和觀察視角，以及對異國風土人情的強烈好奇心，并且大多掌握有測量、照相等技術手段和科學的田野調查方法，有些人就是某些領域的專家，故往往記載準確細密，保存了大量國人司空見慣、熟視無睹、不屑記載的情景，其學術研究亦往往有真知灼見，客觀上爲蒙古地方保存了大量豐富的第一手資料和衆多線索，成爲日後歷史學、民族學、社會學、經濟學乃至相關自然科學研究不可或缺的寶貴財富。國內外學術界，尤其是國際蒙古學界，公認這些歷史文獻具有獨到的價值和其他資料無可比擬的突出優點，其中許多資料本身就是當時相關專業人員『學術性努力』的重要成果。人們迫切期待出版利用這批珍貴的資料。

與國內發達地方相比，內蒙古在搜集、整理和出版民族文獻與地方文獻方面始終處於落後地位，不僅已有的文獻收藏頗爲薄弱，更有大量缺藏文獻分散于國內各地甚至國外。我們理應去追尋、復制這些文獻，並加以系統的整理、研究、翻譯和出版，爲社會各界和廣大讀者提供資料和參考。爲此，內蒙古大學內蒙古近現代史研究所、內蒙古自治區圖書館學會和內蒙古大學出版社攜手合作，着手編輯並出版本套《內蒙古外文歷史文獻叢書》。所謂『歷史文獻』，並非專門記述歷史的文獻，而是指歷史上形成的各類文獻（不論其內容屬於何種學科），其時間下限在1949年以前。叢書以日文文獻爲主，其他外文文獻爲輔；爲保存文獻的基本面貌，以影印方式出版，如有因條件限制而變更開本或其他情形者，則另作編輯說明；叢書編排將按內容區分系列，並適當考慮地

域及時間因素。

本套叢書編輯出版之難點，首先在文獻的搜集，其次是篩選、分類和編排。必須說明的是，有些外文文獻原書已漫漶不清，或筆畫中空，或筆畫殘缺，甚至有的已模糊到難以辨認，但考慮到這批外文文獻的珍稀性，也考慮到文獻收集的完整性，我們仍予以收錄并出版。由于工作量大，時間倉促，且缺乏編印原版外文文獻的經驗，故工作中難免有不盡如人意之處，在此敬請廣大讀者諒解并指正。我們真誠地希望叢書能得到有識之士和社會的支持與幫助，共同開創內蒙古文獻積累、學術研究和文化發展的新局面。

內蒙古外文歷史文獻叢書編委會

二〇一一年十月

# 目錄

|       |    |
|-------|----|
| 原書扉頁  | 一  |
| 原書序文  | 三  |
| 原書目次  | 七  |
| 原書附照片 | 十九 |
| 原書序說  | 二七 |
| 原書正文  | 二九 |



關山  
谷田  
陽武  
一彥  
共著

蒙  
疆  
農  
業  
經  
濟  
論

日  
光  
書  
院  
刊



## 序 文

今回、山田武彦、關谷陽一の兩君が、蒙疆農業經濟論を著述して、江湖に贈らるゝに際し、私に序文を求められた。私は非常の歡びと光榮を感じつゝ、こゝに本文を認めるのである。

私が之を歡びとした理由は、かねて蒙疆を識り、蒙疆を論じ、蒙疆で活躍を希望する人々のためにこの種の著作が、是非、必要であることを痛感してをつたのである。

今本書の内容を一覽すると、このかねての希望と期待が、本書に依つて悉く具現されてをるのを見て私は實に欣快に堪へなかつた。

次に私が本書に序文を書くことを光榮とした理由は、本書の内容が、この種の著述として、恐らく將來定本の一つとして光彩を放つであらうとの確信を持つたからである。従つてかくの如き好著に、菲才なる私が序文を認むることは、正に光榮と言はなくて何であらう。

扱、世人が調査研究を内容とした著述に對して期待するところは、左の二點に盡きるであらう。

第一は眞實を誤りなく語つて欲しいといふことである。

この點、山田、關谷兩君は、單なる一時の旅行者として蒙疆を見聞したのでなく、官命を帯びて、長

らく蒙疆に滞在し、汎有ゆる便宜と機會を利用することができて、この問題を、綿密周到に調査研究されたのである。従つて本書の内容は、眞實を語るものとして、充分の信用を置き得るのである。

第二には眞實を語るにしても、語るだけの資格のある人でなければならぬといふことである。

著者の一人山田君は、帝大在學中から農業經濟を専攻され、卒業後、最初は専ら内地にあつてこの方面の事務を執られてをつたのであるが、滿洲事變が勃發すると、間もなく彼の地に渡られ、滿洲の農業經濟方面を調査され、邦人の移民事業に貢獻されたのであつた。又現に拓植業務の實際に關係されて、移民の實際指導にも當られたのである。その後、支那事變の起ると共に、更に調査研究の歩武を蒙疆地帯まで伸展されたのであつた。

關谷君は山田君の協力者として、共に親しく現地にあつて、非常の努力を振られたのである。

かくして、眞摯にして謙虛、新進にして熱誠なる君等の如き専門家は、學殖と經驗の二點から見て、本書の如き著述の最適任者であることは、君等を識る人々の齊しく首肯するところであらう。

尙又、本書を専門家以外の、他の一般識者に推賞したいと思ふ所以は、本書が、

第一に民族と自然との交渉に關する科學的研究書と認めらるゝためである。

嚴肅なる自然の必然性と、奔放なる民族の創造性とが、相互に規定し、規定されつゝ具現する民族の

現實的姿は、民族の經濟的現象に於て遺憾なく之を看取することができる。殊にこの場合、異種の民族異型の自然が、狹隘なる地帯に於て接觸交叉するやうな場合には、容易に兩者の比較對照をなし得る便宜があるので、民族と自然との交渉を適確の明證性を以て把握了得すべしことが可能である。

萬里の長城を以て世界的に著名である蒙疆地帯は、異種の民族、異型の自然の接觸交叉地帯として最も典型的の地帯である。従つて蒙疆の農業經濟論は、かゝる意味から言つて極めて注目すべき意義がある。

第二に本書は社會學者の所謂『限界社會』の研究書として、幾多の貴重なる資料を持つてをる。

農耕漢民族に接觸する遊牧蒙古民族は彼等の生活環境に、異常の變様が醸成される。しかも、生活環境の變化は獨り蒙古民族社會許りではなく、漢民族社會のうちにも惹起されるのである。相互影響に因つて變様を呈したこの一聯の社會は、普通社會學者に依つて『限界社會』と呼ばれてをる。

この限界社會こそは、兩民族に取つて、時には戦争誘發の禍因をなすと共に、時には統一融合の媒因ともなるのである。本書はかゝる限界社會の農業經濟論として、正に興味津々たるものがある。

第三に本書は蒙疆經濟論として、地帶的に限局された題名を持つてをるのであるが、慧眼なる讀者は本書を通じて支那農業經濟の本質を一層適確に把握されるであらう。

元來、事柄の本質把握は、事柄それ自體のうちに突入して把握するといふ方法もあるが、又之が變化

## 序 文

## 四

變様を透觀することに依つて、一層本質を明瞭ならしむることも可能である。漢民族の農業經濟の本質を把握するには、前記限界社會に於ける種々の變容變化を通じて、彼等の本質を明瞭ならしめ得ることもできるのである。

最後に特筆すべきは、著者の學的態度である。

從來、支那農業經濟の科學的調査乃至研究として、日本に於て發表され、紹介されたものゝうちにはマルキシスト的、唯物史觀の立場に立つものゝ多かつたのに驚かされた。彼等の所論は、論述の起點に於て、過程に於て、又終結に就て論究の以前に、既に布石された觀念的形式性を持つてをるのである。存在の必然性を高調するの餘り、生命の脈動から滲み出るやうな民族の創造性は、彼等の視野から度外されて終つた。こゝに科學的方法を高調し、觀念的所論を排除する彼等唯物史觀論者の非科學性と觀念性が擡頭してをるのである。

この點、著者達は、大局に於て何等斯の如き豫告的な布石を置くことなく、飽迄も純眞なる學的態度を以て終始良心的に科學的メスを振はれたのは衷心から畏敬するところである。

茲に所感の一端を披瀝して序文に換ふるに當り、海軍司政官として現に南方に在る著者の一人山田君の健闘を祈つて止まない。

昭和十九年九月

金 井 章 次

# 蒙疆農業經濟論 目次

## 序 文

## 序 說

|                |   |
|----------------|---|
| 第一部 蒙疆農業の自然的側面 | 一 |
|----------------|---|

|             |   |
|-------------|---|
| 第一章 蒙疆の自然概観 | 一 |
|-------------|---|

|              |   |
|--------------|---|
| 第一節 地 域      | 一 |
| 第二節 地勢、地形、地質 | 二 |

|            |    |
|------------|----|
| 第三節 動植物の諸相 | 六  |
| 第四節 山林の概況  | 一〇 |

|                  |    |
|------------------|----|
| 第二章 蒙疆農業の自然的生産諸力 | 一五 |
|------------------|----|

|         |    |
|---------|----|
| 第一節 土 壤 | 一五 |
|---------|----|

|         |    |
|---------|----|
| 第二節 氣 候 | 二二 |
|---------|----|

|        |   |
|--------|---|
| 一 氣候概要 | 二 |
|--------|---|

|        |    |
|--------|----|
| 二 氣候要因 | 二七 |
|--------|----|

|          |    |
|----------|----|
| (イ) 序 説  | 二七 |
| (ハ) 氣 温  | 三三 |
| (ニ) 水    | 三六 |
| (ロ) 季節 風 | 三二 |

|     |   |
|-----|---|
| 目 次 | 一 |
|-----|---|